

---

# うしろの足音

thlaspi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うしろの足音

### 【ノート】

N0830D

### 【作者名】

thlaspi

### 【あらすじ】

深夜、帰宅中の私（ ）を背後から襲う黒い影の正体は……。あと口ほのぼののホラーを目指してみました。

また残業で遅くなった。

会社から家に電話を入れたら、父はまだ帰っていないかった。父の携帯もなぜか通じない。うちの家族は、父一人、娘一人、犬一匹。犬が自発的に迎えに来てくれるわけもないし、仕方がないので

今から帰るね

と、父の携帯にメールを入れておいた。

最寄の駅から家までは歩いて十五分もかかる。夜の十時を過ぎたらバスの便もないし、今日は歩いて帰るしかない。

まったく、うちのお父ちゃんは、こんな時間までどこで飲み歩いているんだろう。なんて、罪のない父に、心の中でやつ当たりをした。

駅の改札口を出るときには、同じ方向に歩く人が大勢いたのに、五分もたてば、たちまち一人になった。遠くにぼつんと見える街灯の明かりが、あたりの暗さをいつそう引き立てている。

うしろの闇と恐怖心を振り切るように、私は勢いよく足を踏み鳴らして住宅街へと続く坂を登った。

うしろに誰かがついてくる足音がする。

もともと臆病な私のこと、夜道を歩いていると必要以上に怖がりになる。以前、枯葉が風に吹かれる音を人の足音と聞き違えて、悲鳴を上げてしまったこともある。だから最初は、その音を気にしすぎないようにしていた。

でも、今のは間違いなく人の足音だった。軽く振り返って人影があるのを確かめる。暗くて顔も性別も分からなかった。サンダルを履いているのだろうか。ゴムの靴底を引きずるようなベタついた足音が必要以上に大きく聞こえた。

最近は通り魔事件が多いから、足音を聞いただけで、想像が頭の中で暴走を始める。早とちりは私の悪い癖だ。そう思って必死で自分を落ち着かせようとする。

けれど、想像だけが私を置いてどんどん膨らんでいく。でも、本当に怪しい人だったらどうしよう。とにかく早く住宅街の中まで入ってしまったら。私の歩く速度は無意識に速まり、うしろの足音を引き離そうとする。

それでも足音はだんだんこっちへ近付いている。相手が怪しいと決まったわけでもないのに、カバンのひもを握って、振り回す準備をする。万が一、相手が怪しい人で、刃物なんて持っていたらどうしよう。想像の中でありもしないナイフのきらめきが心をよぎる。そんなことをめまぐるしく考えているうちに足音はいよいよ背後に迫り、相手の息遣いまで聞こえるようになった。

ハアツ、ハアツ

近づくにつれ、息はどんどん荒くなる。本当に怪しい人？ 通り魔じゃなくてチカンかもしれない！

うしろから身体を触られる自分がリアルに思い浮かんで、一瞬、身体がすくんだ。

息遣いはすぐ足元まで迫っている。次の街灯まであと少し。でも、住宅街の手前には長くて暗い階段がある。もし階段で襲われたらどうしよう。

階段手前の街灯に手が届くか、というところで私の太ももに何か生温かいものが触れた。

やっぱりチカンだ。怖くて心がぎゅっと固まる。恐怖で頭の中が真っ白になりかけていたけれど、私は勇気をふりしぼって振り返りざまにカバンを振り下ろした。

カバンを振り下ろした先には、スエット上下のこきたない格好を

したおじさんが頭を抱えしゃがんでいる。やっぱり怪しい人だったのか。

私が逃げ出そうとした途端、そのおじさんの連れてくる小型犬が私の太もみに嬉しげにじゃれつく。愛らしく垂れた耳、親しげに私を見つめる黒くて丸い瞳、そして私の太もみに前足をつけて、お得意のお尻フリフリのポーズをしてみせる……まさかこの犬、うちで飼っているマロンちゃんでは？

ということはこのおじさんは……。

「お父ちゃん！」

薄毛が生えた父の額に、カバンの金具が当たったのか、小さな切り傷ができてしまった。

「あたたたた」

家に帰ってから、その傷に消毒薬を塗ってあげただけだけど、かなりしみるらしい。

「もう、お父ちゃん。こんな小さな傷ぐらいでだらしないな」

私はそう言っ、切り傷の上に乱暴にバンソウコウを貼った。さんざん脅かされた仕返しのつもりで、必要以上に力を入れて押さえつけてやった。

「何を言うか！ 帰ったらお前からメールが入っていたから、散歩コースを変更して迎えに行っちゃったのに、恩知らずな娘め！」

父はそう怒鳴ると、まだ傷口の血が止まらないのも気にせず、続けざまに二杯もビールをあおった。

「迎えに来てくれるんだったら、先に携帯に電話入れてくれたらよかったのに」

ちよつと父がかわいそうだと思つたが、黙つてうしろからついて来られたら、やはりチカンと間違われても仕方がない。

「ええい、うるさい！ わしはな、こんな小さい頭の傷より、心が深く深く傷ついとるんだ。実の娘にチカンと間違われて殴られるとは、一生の不覚じゃ」

と、父は言つて、ふてくされた顔をした。

「夜道でうしろから急に触られたら、誰でも殴り返すつて。普通」

私は当然の意見を返した。

「言つとくがな、触つたのはわしじゃないぞ。マロンだ！」

父はそれだけ言つと、ぷいとTVの方を向いてしまい、罪のないスポーツ・ニユースの女性キャスターにやつ当たりをして、さんざん細かい揚げ足を取っていた。

父の機嫌が直るまでには、しばらく時間がかかりそうだった。

寝る前に携帯の充電をしようとして、電車に乗ったときから電源が切りっぱなしだったことに気がついた。電源を入れてみるとメールが一件入っている。

マロンちゃんと迎えに行く。父より

そのとき、ふすまの向こうで父がトイレに立つ足音が聞こえた。廊下を歩く足音がやわらかく響いている。夜道では、どうしてあの足音が怖かったんだろう。

お詫びのしるしに、明日の朝だけは、父の大好きな塩辛い味噌汁を作ってあげようと思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0830d/>

---

うしろの足音

2010年10月11日19時49分発行